

2 総括及び考察

総括

全ての子供たちの可能性を引き出す「学習者主体の学び」へ ～教師に求められる「観」の転換～

「はじめに」で記載したとおり、本県の調査結果について、小学校では、国語、算数はほぼ全国平均と同等となり、理科は全国平均を上回りました。また、中学校では、国語、理科は、悉皆調査が再開した平成25年以降、初めて全国平均と同等となりました。このような結果から県教育委員会としては、各学校及び各市町村教育委員会の取組の成果により、全体としてみれば、着実に学力が定着してきているものと考えております。

一方で、学力調査を観点別に見てみると、「知識・技能」に係る調査結果では全国平均と同等又は上回る結果となったのは6教科中5教科であるのに対し、「思考・判断・表現」に係る調査結果については、6教科中2教科にとどまりました〔表1〕。また、児童生徒質問紙を見ると、自己肯定感や自ら学びを調整する力といった「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果については全国平均を下回る結果も多く見られました〔表2〕。

では、なぜ、こうした状況になっているのでしょうか。学校質問紙や児童生徒質問紙を基に分析したところ、県教育委員会としては、本県における指導（学び）の在り方に課題があるのではないかと考えました。以下、これらについて詳細に見ていくこととします。

1 学力の状況

(1) 「知識・技能」及び「思考・判断・表現」について（「目に見える学力」について）

「知識・技能」に係る調査結果の正答率がよく、「思考・判断・表現」に係る調査結果に課題があることについては上述のとおりですが、その傾向が顕著な教科としては、例えば、小学校の国語と理科があります。それぞれ、「知識・技能」に係る調査結果で2.5ポイント、8.9ポイント全国平均を上回っているものの、「思考・判断・表現」に係る調査結果では、国語は0.8ポイント下回り、理科はわずか0.8ポイント上回っているのみにとどまります。すなわち、全国平均と同等又はそれ以上の結果となった教科（科目）についても、「知識・技能」に係る調査結果における貢献が大きく、「思考・判断・表現」に係る調査結果については、未だに十分な成果が見られない結果となっています〔表1〕。

〔表1〕 本県における学力調査観点別結果

本県		小学校			中学校		
教科	観点	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
国語	知識・技能	73.0	70.5	2.5	70.3	69.0	1.3
	思考・判断・表現	61.2	62.0	-0.8	62.6	62.3	0.3
算数 数学	知識・技能	68.2	68.2	0.0	55.0	59.9	-4.9
	思考・判断・表現	55.9	56.7	-0.8	33.3	36.2	-2.9
理科	知識・技能	71.4	62.5	8.9	46.2	46.1	0.1
	思考・判断・表現	64.5	63.7	0.8	50.1	51.0	-0.9

※ 県平均、全国平均の数値は正答率（％）

(2) 「学びに向かう力、人間性等」について(「目に見えない学力」について)

次に、学力の土台である「学びに向かう力、人間性等」に関する項目について、質問紙を基に分析をしてみました〔表2〕。その結果、「自分にはよいところがあるか。」といった自己肯定感に関する項目は、全国に比べて小学校で7.0ポイント、中学校で6.9ポイントと大きく下回っており、また、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しているか。」「自分で計画を立てて勉強しているか。」といった項目では、小・中学校ともに全国を下回る結果となっています。このことから、自己肯定感や挑戦心など自ら学ぶ力に関する項目、つまり「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果についても、課題が見られることが分かります。詳細については、考察①で改めて分析していきます。

○ 「学びに向かう力、人間性等」に関する質問

〔表2〕 児童生徒質問紙から (全国との比較)

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
自分によいところがあるか。【自己肯定感】	32.4	39.4	-7.0	29.1	36.0	-6.9
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思うか。【自己肯定感】	38.8	46.3	-7.5	32.1	39.9	-7.8
自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしているか。【粘り強さ】	38.5	38.8	-0.3	37.4	36.8	0.6
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しているか。【挑戦心】	25.7	27.6	-1.9	19.2	21.4	-2.2
自分で計画を立てて勉強しているか。【学びに向かう力】	24.1	27.5	-3.4	14.4	15.4	-1.0
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげているか。【メタ認知】	33.3	33.2	0.1	24.2	25.6	-1.4

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

2 学力の状況に係る評価

このように、本県においては、学力の三要素である、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」のうち、「知識及び技能」については、全国と同等もしくは上回っているものの、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」については全国を下回る結果となっています。

それでは、こうした本県の「学力」の現状について、どのように評価をしたら良いでしょうか。まずは、たとえ「知識及び技能」に関する調査結果の正答率の向上が中心であったとしても、それは、学校関係者の方々の学力向上に係る強い意識の表れであると捉えており、こうした意識については、引き続き強く持ち続ける必要があると考えております。

一方、学力の三要素のうち二要素が全国平均を下回る結果にある中において、我々、教育関係者は、胸を張って、「本県の学力は向上している」と言えるのでしょうか。児童生徒が、社会の変化に主体的に関わり、自らの可能性を發揮し、より良い社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにするためには、「学びに向かう力、人間性等」を土台として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を含めた学力の三要素をバランスよく育むことが重要であり、「学力向上の質」を今まで以上に追求していくことが求められます。そこで、今一度、学力とは何かについて考えてみたいと思います。

3 そもそも学力とは何か？

学力については、例えば、学校教育法第30条において、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」とされており、学習指導要領においては、「児童生徒の発達の段階や特性等を踏まえ、『知識及び技能』の習得と、『思考力、判断力、表現力等』の育成、『学びに向かう力、人間性等』の涵養という、資質・能力の3つの柱の育成がバランスよく実現できるようにすること」が示されています。

また、図1は資質・能力の3つの柱を氷山のイメージで表したモデルです。このモデルからも分かるように、とすれば、見える学力（知識及び技能）のみが学力だと捉えられがちですが、学力とは、見えにくい学力（思考力、判断力、表現力等）や見えない学力（学びに向かう力、人間性等）も含んだ概念であり、未来社会で生き抜く力を育むためには、この3つの学力を併せて「学力」と捉え、これらを一体的に育成していくことが大切です。

特に、非認知能力等を含む「学びに向かう力、人間性等」を身に付けさせるためには、教師主体の一律一斉一方向型の指導だけでは十分でなく、学びの在り方の本質を問い直すことが求められます。その際、総合的な学習の時間における「探究」の考え方を、各教科にも活かしていくことも重要な視点です。

併せて、授業だけでなく、学校行事や特別活動、部活動などの「学校ならではの」をフル活用し、社会で求められる真の「学力」を育むことが大事なのではないでしょうか。

また、文部科学省の資料では、「今の子供たちが活躍する2030年の社会は、さらに変化の加速度が増し、複雑で予測困難なものとなります。そうした変化は、どのような職業や人生を選択するかに関わらず、全ての子供たちの生き方に影響をするものと予想されます。社会の変化に対して受け身の観点に立てば、子供たちは、自分の人生を切り拓いていくことが難しくなります。」と述べられています。

そのような時代を生きていく子供たちだからこそ、「知識及び技能」だけでなく、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」など、学力の三要素をバランスよく身に付けることが重要であり、教師は学校教育にしか成し得ない、真の意味での「学力」を子供たちに身に付けさせるために、何を為すべきかを、今一度、問い直す必要があります。

県教育委員会としては、今年度、様々な施策を展開するにあたり、学力とは何かという本質論にこだわり、県指導主事等会議や県教育事務所指導課長等会議、学力向上フォーラム等において、本県教育関係者の皆様と、幾度となく議論を行ってきました。そもそも学力とは何か、そのために私たちは何を為すべきか、私たちの学力向上策はこれでいいのかを、皆さんと一緒に問い続けてきました。本質を見つめ直す過程では、新たな発見や気づきがたくさん生まれます。「そもそも『振り返り』って何ですんだっけ?」「そもそも『めあて』ってなんで書くんだっけ?」などといった会話から、「であれば、今の時代、もっとこんな方法があるんじゃない?」「他にもこんなこともできるよね?」など、とすれば授業のルーティンとして流されがちな一つ

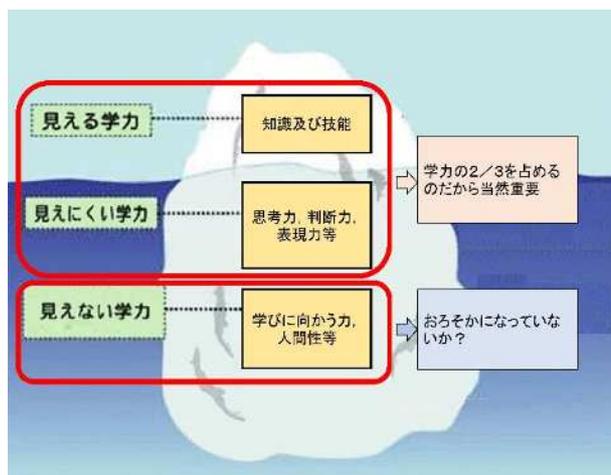


図1 氷山モデルで見たときの学力の捉え（イメージ）

（梶田叡一（1994）の学力の氷山モデルを基に作成）

一つの意味を見つめ直し、より良い手段へと昇華される過程が所々で見られたのはとても刺激的でした。

また、「学力とは何だったか?」「テストで良い点数をとれることが学力なのか?」「そこだけが目的化してしまっただけでは、点数によるテストのない社会に出てから子供たちが困るのではないか?」「子供が未来社会で真に必要な力を育むのが学校教育の意義ではないか?」「それでは、未来社会で必要な力とはどのようなものか?」「そのためには、どのような学び(授業)が求められるのか?」。子供のことを思う教育関係者の皆様が一堂に会せば、当然のように、至る所でこうした議論が始まりました。

ともすれば、学校現場においては、日々の業務に忙殺され、こうした「そもそも論」を語る暇さえないと聞きます。しかし、お互いの教育観や教師観、授業観、子供観などを交流させることで、一人一人の考え方(観)の転換やアップデートが図られます。そしてそのことは、子供たちの学びへと直結するものです。ぜひ、学力についても校内研修を始め様々な場面において議論していただき、本質から、学力向上の在り方について見つめ直していただくようお願いします。

4 学力の三要素のバランスが崩れている要因

ではなぜ、本県において、学力の三要素のバランスが崩れてしまっているのでしょうか。また、こうした真の意味での「学力」を身に付けさせるためには、どのような学びが必要なのでしょうか。

授業に関連する質問紙を見ると、教師が回答する学校質問紙 [表3] では、小・中学校ともに、「指導方法の改善や工夫を行った」という項目が全国を上回っています。また、小学校では「主体的な学び」、「協働的な学び」に関する項目が全国を上回っています。一方で、児童生徒が回答する児童生徒質問紙 [表4] について、同じ質問項目を見てみると、ほとんどの項目で全国を下回っています。このことから、授業改善に関して教師は意識が高まっている、もしくは、取り組んでいると思っているものの、児童生徒はそうした実感を持ち合わせていないことが分かります。

○ 授業に関する質問(学校質問紙と児童生徒質問紙との比較)

[表3] 学校質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
解決に向けて、自分で考え、自分からできていると思うか。【主体的な学び】	26.4	19.3	7.1	17.7	19.2	-1.5
話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか。【協働的な学び】	18.4	15.1	3.3	14.4	20.3	-5.9
習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を行ったか。【指導方法改善】	34.6	21.2	13.4	23.9	20.7	3.2

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

[表4] 児童生徒質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか。【主体的な学び】	27.8	30.5	-2.7	27.4	31.2	-3.8
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができたか。【協働的な学び】	35.8	37.7	-1.9	32.0	34.1	-2.1
自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたか。【個別最適な学び】	38.0	36.7	1.3	18.8	22.8	-4.0

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

なぜ、教師と児童生徒にこのような差が生じているのでしょうか。それは、教師が「したつもり」になっているからであり、換言すれば、教師主体の「何をしたか」、「どう教えたか」ベースの視点での指導が行われているからではないでしょうか。

学習指導要領では、「何を教えたか」という教師の視点でなく、「何ができるようになったか」という、子供の視点での学びの重要性が示されており、子供たちが学んだ事実や感じた事実を大切にすべきことは言うまでもありません。

「子供たちが本当に課題意識をもって取り組んでいるのだろうか。」「話し合いを通じて、自分の考えを深めたり、広げたりしているのだろうか。」佐藤(2022)は、静かに教師が書いた板書を綺麗にノートに書き写すだけのような児童生徒の姿を、学んだふりをして学びから逃走していると指摘し、これを「学びの偽装」として警鐘を鳴らしています。そして、「伝統的な一斉授業を行っている教室では、ほとんどの子供が学びの偽装を行っている。」とまで述べています。

こうした状況を打破するためには、まずは、子供主体・学習者主体へと発想を転換することが何より重要です。その上で、教師が「何を教えたか」、「どのように教えたか」ではなく、その結果として、「子供たちがどのような反応をしたか」、「どのように感じたか」、「どのようなことができるようになったのか」等、「子供たちの学びの姿」に基づき、授業改善につなげていくことが求められます。

このように、そこに子供の学びがあるのかということを常に意識することで、教師と児童生徒との意識の差が縮まるとともに、学習者主体の授業へと改善されていくのではないのでしょうか。

現在、県教育委員会が取り組んでいるコアスクールプロジェクトは、その考えを基に実践しています。また、本プロジェクトに限らずこうした取組を参考に、「子供が学んでいるか。学んでいるか。」の視点から授業を捉え、子供の視点から議論する習慣が大切です。



コラム 学校全体を学習者主体の授業へと変革させるために ～コアスクールプロジェクトの取組～

県教育委員会が取り組んでいるコアスクールプロジェクトは、子供の学びの姿に着目した校内研修を展開することで、授業改善や組織活性化へとつなげていく取組です。

1 子供の学びの姿(事実)からスタートする

校内研究授業では、子供たち一人一人の学びの姿を丁寧に見取ります。推測や評価を一切入れず、「首をかしげていた。」「すぐに鉛筆を持って書き出した。」等、子供の学びの姿(事実)のみを付箋に書き込みます。

2 子供の学びの姿(事実)の解釈について交流する

付箋に書かれた子供の学びの姿のもつ意味について、お互いの解釈を交流する中で、教師一人一人がもっている授業観や子供観など、お互いの観の揺らぎが始まります。新たな気付きや発見が生まれ、教師が子供の学びの姿を見取る力が高まるとともに、代案を示すことにより指導方法等についての考えが教科の枠や校種の違いを超えて深まっていきます。

3 目指す子供像に迫られていたかどうかを検証する

子供の学びの姿の背景を子供の立場で考え、目指す子供像に迫るヒントを探し出します。

4 共通実践事項を検討し、実践する

子供たちのために、何をすべきか。全員で取り組むべきことを話し合い、実践していきます。

5 学習者主体の学びとは何か

「子供は生まれながらに自らを成長・発達させる力（自己教育力）をもっている。」

これは幼児教育者であるモンテッソーリの言葉です。予測困難な時代においては、誰も正解を教えてくれません。こうした未来社会において、子供たちは自ら考え、自ら学んでいく必要があります。

一方で、今回の学力調査の結果を見ると、未だに知識・技能の定着に重きをおいた教師主体の授業が展開されていることが危惧されます。知識・技能の定着自体は当然に必要なことではありますが、予測困難な時代において知識・技能などは陳腐化するスピードも速いとの指摘もある中、身に付けた知識や技能を基に思考、判断、表現したり、自ら学んだりする力も今まで以上に重要性を増していきます。そうした観点から、学びの在り方を見つめ直す必要があります。

学校教育において、教師主体の授業によりあらゆることを教え込まれた子供たちは、いざ社会に出てから教えてくれる人がいなくなった際に立ちゆかなくなってしまいます。こうした時代がすぐ近くの未来社会に待ち受けているからこそ、子供は本来有能な学び手であるという原点に立ち返り、「学習者主体」の授業を展開することが重要です。学校教育は大きな転換期に来ています。この時代に子供たちの学びに関わることができることに喜びを感じながら、学習者主体の授業へ歩みを進めていきましょう。詳細については、考察②で改めて分析していきます。

考察①

「学びに向かう力、人間性等」は育まれているか？

総括で述べたように、本県においては、学力の三要素の1つである「学びに向かう力、人間性等」について課題が見られる結果となりました。そこで、**考察①**では、これからの時代において一層重要性を増すとの指摘もある「学びに向かう力、人間性等」について、全国学力・学習状況調査で継続して高い正答率を維持しているA県との比較を交えながら考察していきます。

1 学びに向かう力、人間性等について

「学びに向かう力、人間性等」は、児童生徒が「どのように社会や世界と関わり、より良い人生を送るか」に関わる資質・能力であり、他の2つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素です。

具体的には、学習指導要領解説にも示されているように、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、より良い生活や人間関係を自主的に形成する態度等があり、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものです。

また、多様性を尊重する態度や互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれており、一般的に非認知能力と認識されています。中室(2015)は、「テストの点数等で測ることが可能な認知能力は時間が経つとなくなるものもありますが、非認知能力は一度身に付けると一生持続する。」と述べています。

以下、代表的な項目について、A県との比較も交えつつ見ていきます。

2 自己肯定感

児童生徒は自分の良さや可能性を実感することで自信をもち、挑戦する気持ちが生まれます。この前向きな意欲が、学びに向かう力となり、新たな問題を解決し、自己実現につながっていきます。実際、本県の児童生徒質問紙と学力調査の結果をクロス集計したところ、「自分には、よいところがあると思いますか。」の項目に肯定的に回答する児童生徒ほど、全ての教科において正答率も高くなっており、学力との相関が見られます〔図2〕。

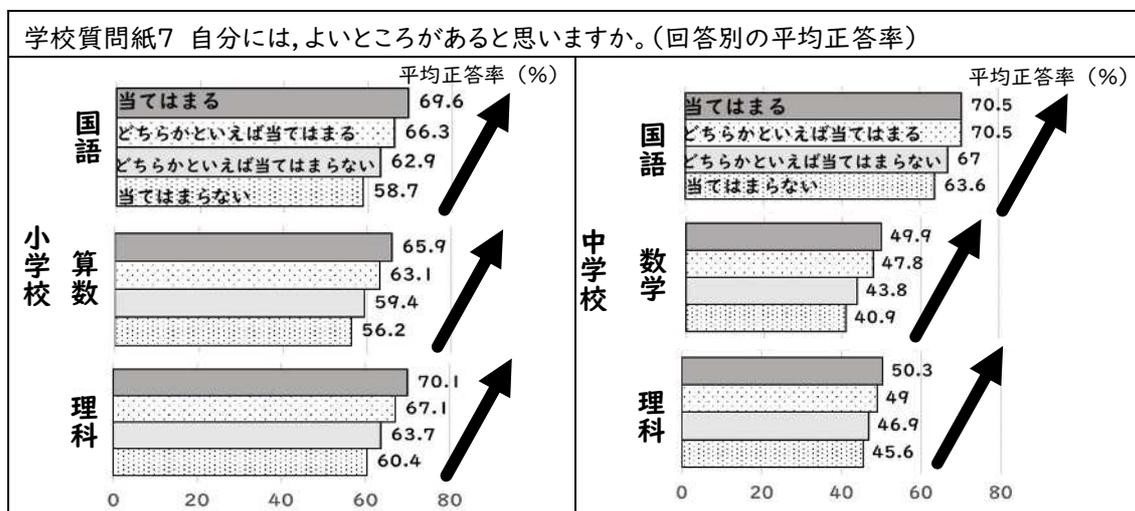


図2 自己肯定感と学力調査の正答率とのクロス集計

その上で、本県の児童生徒の自己肯定感に関する項目について、学校質問紙と児童生徒質問紙の回答を比較したところ、大きな差があることが分かりました。

学校質問紙で、教師は「学校生活の中で、児童生徒一人一人のよい点や可能性を見つけ評価する（褒めるなど）取組を行いましたか。」の項目に、当てはまると回答した割合は小学校で 4.5 ポイント全国を上回り、中学校でもほぼ全国と同等の割合となっています。

しかし、児童生徒は「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。」に当てはまると回答した割合は、小学校で 7.5 ポイント、中学校で 7.8 ポイント全国を下回る結果となっています。

一方で、A県を見てみると学校質問紙、児童生徒質問紙ともに、当てはまると回答した割合が、全国を大きく上回る結果となっています〔図3〕。

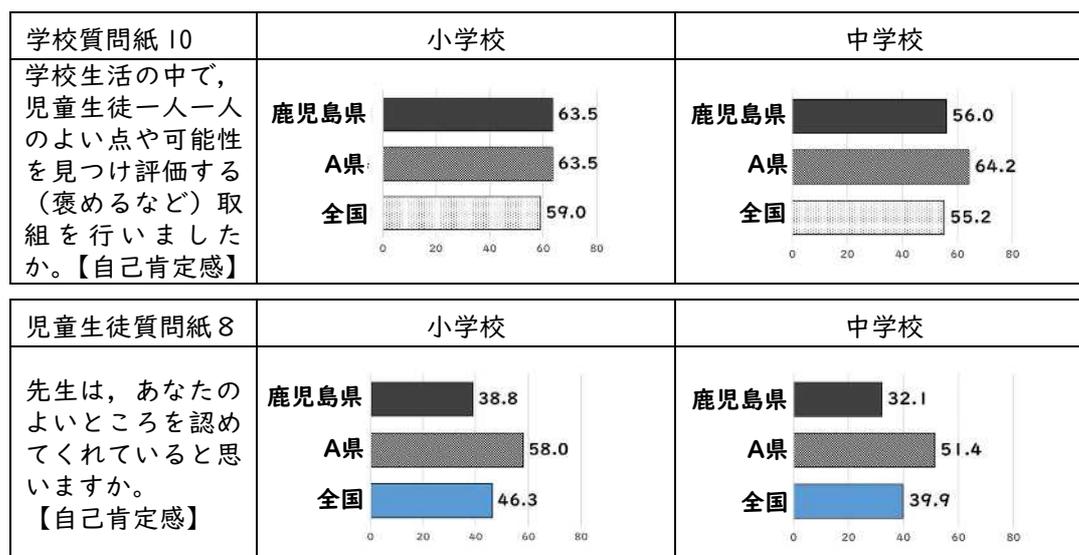


図3 自己肯定感に関するA県及び全国平均との比較

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合（％）

このように、本県において教師と児童生徒の意識のずれがあるのは何を表しているのでしょうか。子供たちが「先生がよいところを認めてくれている。」と実感するためには、どうしたらいいのでしょうか。その際のポイントとなるのは、教師がどのような子供観をもっているかということです。

奈須（2021）は、個別最適な学びを行う上で、子供は一人一人違っているし、違っていいという次のような子供観が大切になると述べています。

【多様性】

子どもは一人一人違っているし、違っていいというものです。学習に関わって子どもたちの間に認められる個人差、一人一人の子どもに特徴的な現れや要求は、全てその子ならではのかけがえのなさとして大切にされ、学習の成立や質の向上に資するように扱われるべきです。

子供が十人いれば十通りの良さがあり、一人一人が違うという子供観を根底にもつことで、画一的な枠組みを基準とした良さだけでなく、一人一人の個人差を認めた上での良さに改めて気付くことができるのではないのでしょうか。

また、中室（2015）は、「子供を褒める時には、具体的に子供が達成した内容を挙げることが重要です。」と述べています。そうすることによって、更なる努力を引き出し、難しいことに対して挑戦する子供が育つと考えられます。

さらに、奈須(2021)は、多様性とともな大切な子供観として、すべての子供は生まれながらにして有能な学び手であるという、次のような考え方も述べています。

【自立性】

すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手であるというものです。子どもは学ぼうとしているし、学ぶ力をもっています。すべての子どもは、適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで環境に関わり、その相互作用の中で自ら学びを進め、深めていく存在だということです。

子供は元来学びたいと思っています。そうした考えの下、子供一人一人の個人差や特徴的な現れに応じた適切な環境との出会いを教師が意図的に作り出すことで、子供は自ら進んで環境に関わり、それぞれの可能性を発揮するのではないのでしょうか。そして、私たち教師がその過程をしっかりと見取り、認めることこそが、子供たちが褒められて嬉しいと感じる場面なのではないのでしょうか。そのような場面は、授業はもちろんのこと、学校行事や部活動等、学校には多く存在します。多様性や自立性といった子供観を今一度大切にして、学校教育活動全体の中で、自己肯定感を高めるにはどうしたらいいかを考えていきましょう。

3 自らの学びを調整する力

児童生徒の学びに向かう力を育む上で、主体的に学習に取り組む態度の一つの側面である自らの学習を調整する力が重要となります。

そこで、これらに関する質問紙について着目すると、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげているか。」の項目では、A県は小学校が44.6%、中学校が38.2%当てはまると回答しています。本県との差は小学校で11.3ポイント、中学校では14.0ポイントと大きな差になっています。

また、「家で自分で計画を立てて勉強しているか。」の項目では、A県は小学校で45.7%が当てはまると回答しています。本県との差は、21.6ポイントあります。中学校は27.7%で、差は13.3ポイントあります〔図4〕。

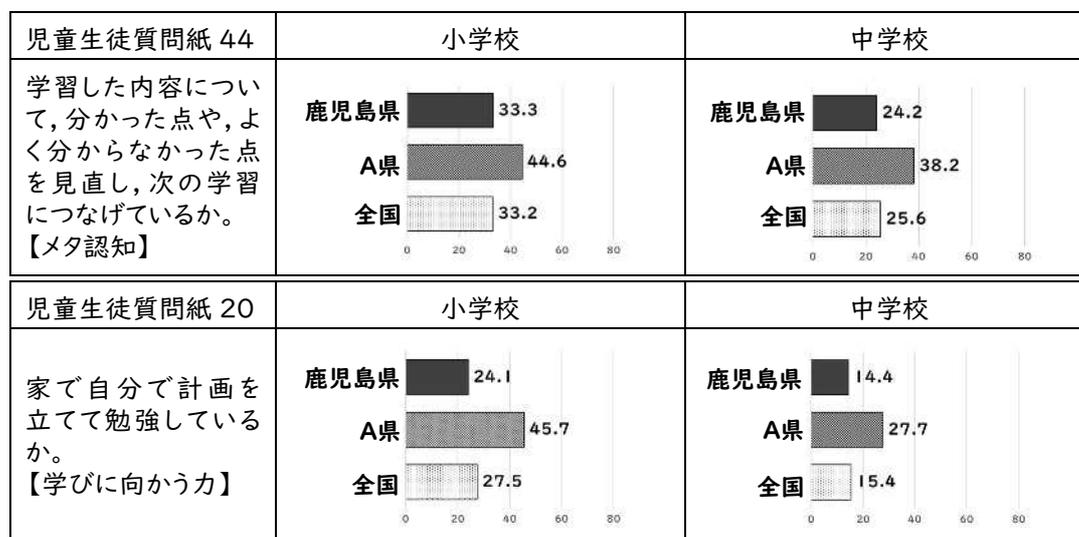


図4 自らの学びを調整する力に関するA県及び全国平均との比較

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

A県では、児童生徒が自らの学びを振り返ることで、次の学習へつなげたり、家庭でも自らの学習を計画を立てて勉強したりしています。つまり、A県は自らの学びを調整しながら、学習に取り組んでいる児童生徒が多いことが分かります。

本県においても、学習者主体の授業を行う中で、児童生徒が自らの学びを振り返る機会を設けることで自らの学習状況を評価したり、家庭での学習においても自らの学習課題を決定して取り組んだりするなどして、自らの学びを調整する力を育てていくことが求められます。



コラム 保護者や地域との連携による非認知能力の育成

「学びに向かう力・人間性等」を含む真の意味での学力の定着には、学校の取組が重要になってきますが、それだけでは不十分です。言うまでもなく、家庭や地域は、学校教育の土台となるものです。

学校、家庭、地域が有する教育機能はそれぞれに異なり、いずれか一つの教育機能のみで児童生徒の育成が図られるわけではありません。家庭や地域と連携・協力しながら児童生徒を育てていくことが重要です。

児童生徒質問紙の結果から、本県においては「将来の夢や目標を持っていますか。」、「読書は好きですか。」、「地域の行事に参加していますか。」などの保護者や地域との連携が不可欠な項目において、小・中学校共に全国平均を上回っています〔表5〕。

〔表5〕 児童生徒質問紙から見える本県の強み

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
将来の夢や目標を持っていますか。	65.3	60.4	4.9	43.0	39.8	3.2
読書は好きですか。	43.7	41.9	1.8	41.0	37.9	3.1
今住んでいる地域の行事に参加していますか。	30.1	23.4	6.7	16.9	14.3	2.6

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合（％）

これらは保護者や地域が協力的な鹿児島県の強みでもあると言えます。これらの強みをさらに生かしていくためにも、保護者や地域と同じマインドで子供を育てていくことが重要です。

保護者や地域の方々には、まだテストの点数等の目に見える学力を中心とした知識偏重の学力観をもっている方も多く見られます。真の学力とは何かということを学校からも発信し、共通の学力観をもちながら子供を育成していくことで、さらに鹿児島県の強みが生かされていくと思われます。

考察②

学習者主体の授業への転換は図られているか？

考察①でも述べたとおり、「学びに向かう力、人間性等」については、学校はもちろんのこと、家庭や地域と連携・協力しながら育てていくことが重要ですが、学校教育で最も児童生徒と接する時間の多い授業において、学力をバランスよく育成するためには、どのような授業改善を図る必要があるのでしょうか。

総括でも述べたとおり、学力調査の結果 [表 1] から、「知識・技能」と「思考・判断・表現」に係る調査結果には、大きな差があることが分かりました。この2つの観点について、継続して高い正答率を維持しているA県と比較することで、学習者主体の授業への転換をどのように行っていけば良いのか探っていきます。

1 学力をバランスよく育成するために

本県の「思考・判断・表現」に係る調査結果について、全国平均を上回ったのは、6教科中2教科でした。また、全国平均正答率との差を見ると、「知識・技能」における差よりも「思考・判断・表現」の差が上回っている教科の数は、ほぼありませんでした [表 1]。

一方、A県では、「思考・判断・表現」に係る調査結果について、全ての教科で全国平均を上回っており、かつ、6教科中3教科において、「知識・技能」に係る調査結果における全国平均の差よりも「思考・判断・表現」に係る調査結果における差の方が上回っていました [表 6]。このようにA県では、本県では課題となっている「思考・判断・表現」における正答率の高さも強みとなっています。

[表 6] A県の学力調査観点別結果

教科	観点	小学校			中学校		
		A県平均	全国平均	差	A県平均	全国平均	差
国語	知識・技能	77.1	70.5	6.6	72.3	69.0	3.3
	思考・判断・表現	66.1	62.0	4.1	66.7	62.3	4.4
算数 数学	知識・技能	70.5	68.2	2.3	62.9	59.9	3.0
	思考・判断・表現	61.3	56.7	4.6	39.0	36.2	2.8
理科	知識・技能	70.0	62.5	7.5	48.5	46.1	2.4
	思考・判断・表現	71.0	63.7	7.3	53.9	51.0	2.9

※ A県平均、全国平均の数値は正答率(%)

ではなぜ、A県では、「知識・技能」はもちろんのこと、「思考・判断・表現」に係る調査結果も高い平均正答率となっているのでしょうか。これについて、A県の授業に関する質問紙を分析したところ、本県との違いが見えてきました。

A県の授業に関する学校質問紙、児童生徒質問紙を見てみると、小・中学校ともに、教師よりも、児童生徒の回答の方が、「主体的な学び」や「協働的な学び」に関して高い数値を示しています [表 7] [表 8]。また、授業に関するA県の児童生徒質問紙を見ると、全ての項目で全国平均を上回っています。本県の質問紙で同様の分析を行った [表 3] [表 4] と比べればその差は一目瞭然であり、A県の児童生徒は本県の児童生徒より、主体的な学びや協働的な学びを実感していることが分かります。

○ 授業に関する質問（学校質問紙と児童生徒質問紙との比較）

[表7] 学校質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	A県平均	全国平均	差	A県平均	全国平均	差
解決に向けて、自分で考え、自分からできていると思うか。【主体的な学び】	24.1	19.3	4.8	21.1	19.2	1.9
話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか。【協働的な学び】	15.3	15.1	0.2	16.5	20.3	-3.8
習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を行ったか。【指導方法改善】	26.5	21.2	5.3	22.0	20.7	1.3

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合（%）



[表8] 児童生徒質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	A県平均	全国平均	差	A県平均	全国平均	差
課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか。【主体的な学び】	38.8	30.5	8.3	41.0	31.2	9.8
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができたか。【協働的な学び】	44.3	37.7	6.6	50.3	34.1	16.2
自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたか。【個別最適な学び】	48.8	36.7	12.1	34.7	22.8	11.9

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合（%）

A県の「思考・判断・表現」の平均正答率が高く、また、**考察①**で見たとおり、「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果が全国平均よりも高い結果となっているのはなぜでしょうか。そして、教師以上に児童生徒が「主体的な学び」や「協働的な学び」を実感しているのはどうしてでしょうか。

いくつかの要因はあるかと思いますが、一つは授業の在り方だと考えられます。A県では、ほとんどの小・中学校で「探究型授業」が行われています。「探究型授業」では、授業の冒頭で学習課題を決め、その上で子供一人一人が思考を展開します。そして、全ての子供が考えをもてた段階で、グループでの話し合いが行われ、各グループの発表を基に学級全体の学び合いが行われます。最後に、それまでの学びを振り返り、自分の学びをまとめ発表します。このように、授業を通して、課題解決が主体的・協働的に図られるプロセスになっています。

つまり、A県では子供たち自身が主体的・協働的な学びを行っていると感じる授業となっており、学習者が主体となった授業が展開されていると言えます。

では、そのような学習者主体の授業を展開していく際に、その根底にある考え方というのはどのようなものでしょうか。

2 学習者主体の授業へ

一律一斉一方向型の指導を行う根底には、大人が教えない限り子供は学ばないし、学べないという子供観があるのではないのでしょうか。「適切な環境さえ用意すれば、あとは子供たちが自発的に学んでいく」。そんな話をいきなり信用するのは難しいことかもしれません。しかし、まずは、子供は自ら学ぼうとしているという子供観をもつところから始めていきましょう。

では、このような子供観に立つとき、教師にはどのようなことが求められるのでしょうか。まずは子供を信頼し、学びに関わる多くの決定を子供に委ねることが大切です。その上で、子供たちが自立的に学びを進められるように、教師は学習環境を整えたり、資料や教具を工夫したりすることが求められます。また、教師は子供たちだけでは難しい部分についての適切な支援を行うなどのファシリテーター的な役割が求められます。

さらに、子供たちの多様性に対しては、学習の成立に向けて一人一人の子供を丁寧に見取

り、必要に応じて適切な支援をタイミングよく行うことが重要な役割となってきます。

それでは、具体的には学習者主体の授業とはどのようなものでしょうか。

本県でも、すでに「個別最適な学び」や「探究型の学び」に取り組んでいる学校もあります。その取り組んでいる学校の一つが鹿児島市立山下小学校です。

山下小学校（県総合教育センター研究提携校）の国語科では、「個別最適な学び」に着目して、子供が言葉による見方・考え方を働かせ自己調整しながら追究するために、単元及び1単位時間の中で、学びをデザインしています〔図5〕。

単元での学習においては、単元前半では新たに学んだ知識及び技能の定着を図るために課題解決に必要なことを習得し、単元後半では習得したことを活用する自由進度学習を設定しています。

自由進度学習とは、子供が習得したことを生かして時間や場、学習教材を自己選択しながら課題を追究し、スモールステップで学習に取り組んだり、発展的な学習に挑戦したりする学習です。自由進度学習を行う際は、教師は子供一人一人に適切な支援をするために、適宜、子供からの報告の時間を設け、学習進度を把握する必要があります。また、子供は学習計画や「自分の問い」を基に今の自分の学びを振り返り、自ら学びを調整して、次時の課題の解決に向けて、連続・発展した「自分の問い」を新たに立てることが大切になります。

第4学年 国語科 学びのデザイン案

【単元名：中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう】
 (教材名「世界にはこんな和紙」、「伝統工芸のよさを伝えよう」光村4年下) 2組 計 33人 指導者 中道 千鶴

単元の目標

- 自分の考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解することができる。【知識及び技能(2)ア】
- 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約することができる。【C読むこと(1)ウ】
- 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫することができる。【B書くこと(1)ウ】
- 「自分の問い」を立て、目的を意識して読み、「かごしま よかとこ リーフレット」を進んで書くこととしている。【学びに向かう力、人間性等】

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
自分の考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解している。	① 「読むこと」において、目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約している。 ② 「書くこと」において、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。	① 「自分の問い」を立て、目的を意識して要約しようとしている。 ② 自分の計画に基づいて、「かごしま よかとこ リーフレット」を進んで書くこととしている。

今後の履修する単元

第4学年 国語科：どうももったことを中心にしようかいしよう (教科「うなぎのなぞを追って」)	家庭学習 (調べ学習)
第4学年 社会科：「特色ある地域と人々のくらし」	第4学年 総合的な学習の時間 (作るよ10年間のアルバム)

単元を見直す問い

試し書きを試してみただけで、要約することができなかった。どのようにしたら書けるのだろうか。

広島市の4年生に鹿児島市の魅力を伝えるためには、どのように要約して伝えるとよいだろうか。

リーフレットの構成が分かったよ。自分は何をリーフレットに書こうかな。

長い文章を要約するには、どのように書いたらよいのだろうか。

要約のポイントを使って要約することができるかな。

自分の計画に沿って、リーフレットを書きあげたい。

鹿児島市の魅力を要約して、鹿児島市の魅力を伝えるぞ。

広島市の4年生に鹿児島市の魅力が伝わってうれしいな。高島の伝統工芸について、もっと調べてみたい。

単元の学習活動

1 相手意識や目的意識、要約について確認し、自作の教材「世界にはこんな和紙切り」の要約をする。(試し書き)

2 試し書きを基に「自分の問い」を立て、学習計画を立てる。

3 リーフレットについて知る。
 (1) リーフレットの構成(表紙、説明する文章、裏表紙)について知る。
 (2) 教師作成の「かごしま よかとこ リーフレット」を見て、作りを促える。

4~8 要約の仕方を確認し、ポイントにまとめる。
 (1) 教材「世界にはこんな和紙」の文章を読み、要約に必要な語や文を見付ける。
 (2) 教材「世界にはこんな和紙」を要約し、約した文章を共有する。
 (3) 要約するときに大切なポイントを確認する。

9~15 (自由進度学習)
 「かごしま よかとこリーフレット」を書く。
 (1) 鹿児島市の和紙について、リーフレットを作成する。【本時：11時】
 (2) 学級でリーフレットを読み合う。

教師の手立て

鹿児島市の魅力を伝える相手に広島市の小学4年生に設定することで、学習への意欲を高められるようにする。
 ・150字程度の自作の教材文を提示し、「簡潔に伝えたい」などの発言を引き出すことで、要約することの必要性を感じることができるようになる。

要約の試し書きを書く時間を設定することで、課題に気付く「自分の問い」を立てることができるようになる。
 ・「自分の問い」を共有する時間をとることで、単元全体の見直しをもつことが出来るようにする。
 主：(発話)、「自分の問い」

規製のリーフレットと教師作成のリーフレットを提示することで、リーフレットの構成や特徴を捉えることが出来るようにする。

題名の言葉や繰り返しの言葉、強調や意味の強弱などの要点となる語や文を見付けることができるようにする。
 ・学級全体で要約のポイントをまとめる前を設定することで、自分のリーフレットに生かすことができるようにする。
 思・判・表：(ワークシート・ノート・発話)

自由進度学習の9時~15時の計画を立てる活動を取り入れることで、学びを自己調整できるようにする。
 ・教壇側のワークシートを準備することで、主体的に取り組むことができるようにする。
 ・「一人で」や「友達と一緒に」、「先生と一緒に」など教室の場の設定を行うことで、学習進度に合わせて場を選ぶことができるようにする。
 思・判・表：(ワークシート、リーフレット)

自分たちのリーフレットと広島市の4年生のリーフレットを交換して読み合う時間を設定し、実際にオンラインで感想を交流することで、学びの達成感を味わうことができるようにする。
 ・単元全体の振り返りの場を設定し、要約することのよさや学びのよさを価値付けすることで、これからの学習や日常生活における学びへの興味・関心を高めることができるようにする。
 主：(発話、ノート)

見方・考え方 学びの形態 山下小校 時間 講師・観点 (評価資料)

図5 山下小学校 国語科 学びのデザイン案

このように単元の中で、できるところから自由進度学習などの「個別最適な学び」を取り入れるなど、今行っている授業でできるところから変えていくというスタンスで、まずは取り組んでみるのが大切です。

県教育委員会では、[図6]にあるように、これまでの学びから、令和の時代に目指す学びとして、特に「個別最適な学び」や「探究型の学び」へシフトしていくことで、学習者が主体となり、これからの社会を生きていく自律した学習者が育まれていくと考えています。

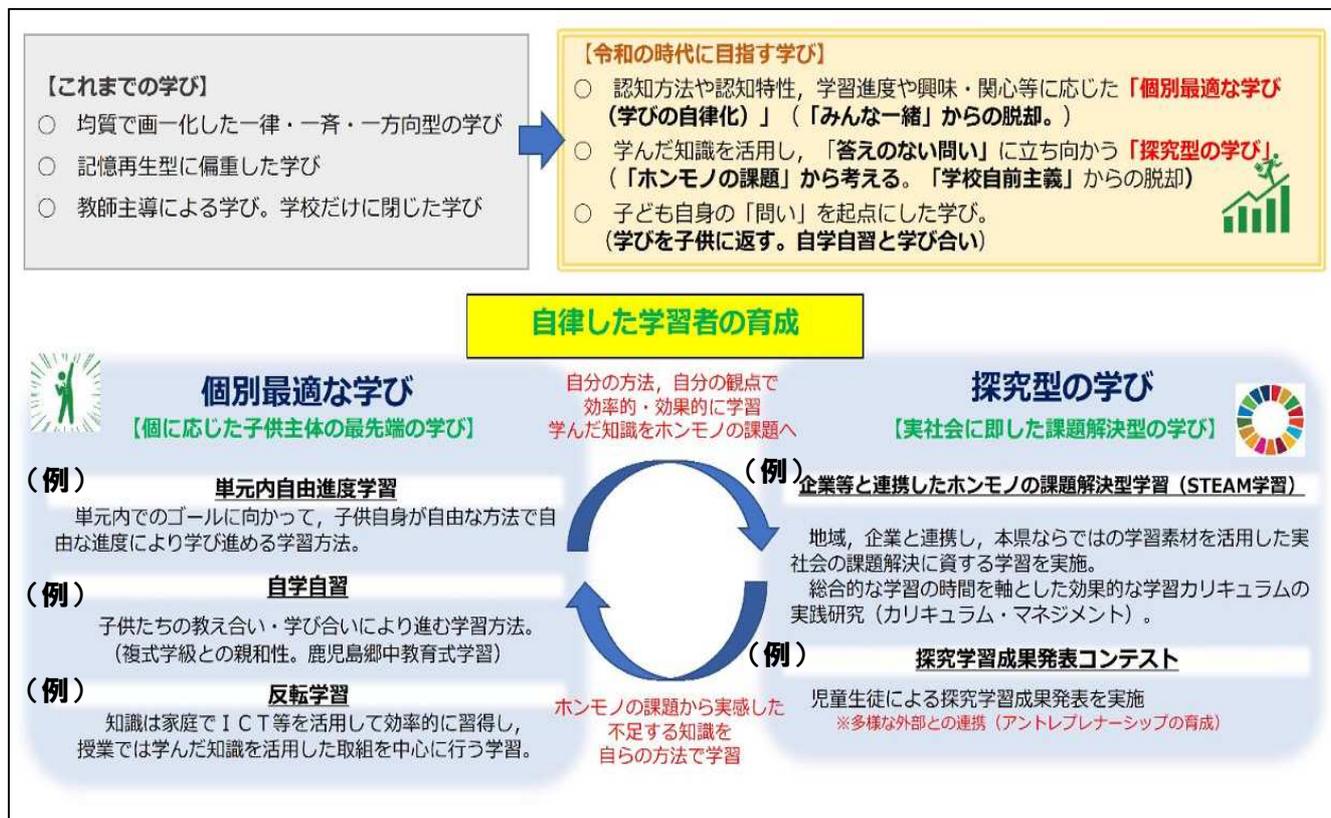


図6 令和の時代に目指す学び

「令和の時代に目指す学び」に向けて、「個別最適な学び」や「探究型の学び」など、先生方が今、行っている授業のできるのところから、学習者主体の授業を始めていきましょう。